東京薬科大学新聞

発行所
東京薬科大学
新聞会
責任者
原　太志

号外

粟津荘司先生・太田明廣先生

御退職インタビュー

今春、薬学部学部長であり第二薬剤学教室の粟津荘司先生と、第二生薬学教室の太田明廣先生が御退職される。それに伴い最終講義が開講されるので、お世話になった人は是非聴講しに行って欲しい。

日時
太田先生　三月五日（金）
粟津先生　十二日（金）
場所
一一一講義室

第二薬剤学教室

粟津荘司先生

第二薬剤学教室を受け持っておられた粟津荘司先生は、昭和三十六年に東京大学大学院薬学研究科博士課程を終了し、東京大学付属病院薬剤部助手を務められた。その間、三十九年から二年間アメリカへ留学された。その後、四十二年に東京大学薬学部助手を経て、同年助教授に就任された。そして五十三年には、本学薬学部に赴任してこられ、平成九年度から二年間、薬学部学部長を務められた。

先生は、薬の吸収機構及びその促進を研究されていた。また、今年度の授業では、一年生の薬学入門と三年生の薬剤学を担当された。

今後、本学がどのように変わっていくのが望ましいかを尋ねた。これに対して、先生はあくまで私的な意見としながらも答えて下さった。

「今後、少子化が進む中で学生数を確保するには、大学の特徴を出していく事が必要である。同時に私立の薬科大学は、目に見える実績として国家試験の合格率を上げなくてはならない。しかし四年間という限られた時間の中で、特徴付けと国試の実績との両立を考えると、前者を実行するのは難しい。この問題に対する解決策として薬剤師養成に重きを置いた学科と、薬の科学についての学問を重視した新しい学科の二つに分けるといった方法が考えられる。いずれにしろ、新しい道を拓いて行かざるを得ないだろう」

第二生薬学教室

太田明廣先生

太田明廣先生は東京大学医学部薬学科を卒業し、同大学院、理学研究所そして東京工業大学資源科学研究所を経て昭和四十六年に助教授として本学に赴任され、翌年には教授となられた。

最初に先生の本学での研究内容について語って頂いた。

「以前に複素環の化学や化学発癌について研究していましたが、天然資源を使って何かできないだろうかと考えました。本学に着任してから、アミノ酸を使った様々なアルカロイドの合成研究を行ないました」

先生は毎年、三年生の天然医薬品化学と生薬学実習、二年生の化学A実習を担当されていた。そこで、講義の際に心掛けていた事を伺った。

「学生達が天然物に興味を持ってくれるように教えたつもりでしたが、なかなか思うようにはいきませんでした。学力の積み重ねが足りないせいか、講義についてこられない学生もいたようです」

最後に、東薬生に対して一言お願いした。

「まず、教授方との交流をもっと持ちましょう。それにより、自分に適した分野が分かってくるはずです。次に、全てにおいて意欲的に取り組みましょう。特に、講義に出て積極的に勉強する事が肝要です。また、医療に携わる人間として恥ずかしくない知識や考え方を持つ事が大切です。加えて、身なりもきちんとしましょう。全ては心構えから始まります」